

# 学習意欲を高める授業改善の検討

## ～ 構成的グループ・エンカウンターを活用した「教養演習」の実践～

曾山和彦  
教職センター

# Examination of the class improvement to raise learning motivation

## - The class that utilized Structured Group Encounter -

Kazuhiko Soyama  
Center for Teacher Education

The purpose of this study was to examine the class to raise the learning motivation of the students. The object class was "the culture practice" that utilized Structured Group Encounter. 22 Students were given two kinds of questionnaires : a class satisfaction scale and self-description. As a result, it was suggested that the interactive lecture raised feeling of satisfaction and the learning motivation of the student. The results showed that mutual relation between students in the class was very important element. In addition, it was thought that the relation was important for the first year experience.

Keyword : learning motivation, Structured Group Encounter, first year experience

### 1. 問題と目的

文部科学省<sup>1)</sup>(2009)の「平成20年度学校基本調査速報」によると、大学・短期大学進学率(過年度高卒者等を含む)は、55.3%(男子56.5%、女子54.1%)であり、過去最高値を示している。18歳人口が減少を続ける現代は、大学希望者総数が入学定員総数を下回り、大学・学部を問わなければ誰もが大学に入ることができる「大学全入

時代」と呼ばれる時代である。以前のように限られた者だけが大学に入学した時代と異なり、多様な学習履歴をもつ学生が入学してくる時代である。こうした時代における大学教育は、中村<sup>2)</sup>(2009)が指摘するように、「教員が学問の成果を教えること」から「入学した学生が学習を進めるためにあるもの」へと転換が求められるということになる。それ故、教員は、「何故、学生たちの学習意欲が乏

しいのか、知識が定着しないのか」という問いから、「どうしたら学生たちの学習意欲が高まるのか、知識が定着するのか」という問いへの転換を図る必要があるだろう。

近年、大学における授業改善の試みは、FD(Faculty Development；教員が授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取組の総称)活動として多様に展開されてきている。本「名城大学教育年報」もまさに、本学教員の教育成果を実績として積み上げるFD活動の一つである。

授業改善における先行研究からは、次のような成果、方向性が示されている。杉江<sup>3)</sup>(2000)は、学生に授業をさせ、質疑応答による双方向の話し合いによって情報交換がなされるような授業展開を取り入れた。その結果、学生の積極的な授業参加と準拠集团的雰囲気の形成が見られたことを報告している。関田<sup>4)</sup>(2005)は、大学の通信教育部におけるスクーリング(集中講義)に協同学習技法を随所に用いたグループ学習を取り入れた。その結果、学生の自尊感情、学習効力感の向上が確かめられたことを報告している。安永<sup>5)</sup>(2009)は、本研究同様、「教養演習」において協同学習に基づく対話中心の授業を行い、基本技法として「Think-Pair-Share」と「Round Robin」を多用したと述べている。これら2つの技法は、「クラス全体に質問を与える 一人で考える ペア(Think-Pair-Share)で、グループ(Round Robin)で順番に考えを述べる クラス全体で話しあう」という手順をとるものである。また、授業展開として、始業チャイムと同時に教師の挨拶で授業開始、仲間グループでの挨拶、授業内容の説明、授業通信、その日の授業内容、授業記録紙への記入、教師の終わりの挨拶、仲間同士の挨拶、という流れで進めたと報告している。

中村<sup>2)</sup>(2009)は、学生が育つ授業・学生を育てる授業を行うために、入学する学生のタイプに応じたカリキュラムの作成、初年次教育の重視、学習階梯に沿ったゼミナール実施の必要性について論じている。小森他<sup>6)</sup>(2008)は、初年次教育に成功を収めた他大学の視察から、グループ学習の導入、授業外での学びにつながるプログラム推進、初

年次教育の核となる科目を中心としたカリキュラムの見直しの必要性を提言している。

以上、先行研究の知見を基に、本研究では、学生の学習意欲を高めるための授業改善に焦点を当てた実践を行い、その成果について検証することを目的とする。具体的には、本学1年生を対象とした「教養演習」において、構成的グループ・エンカウンターを活用した参加型授業を実施する。学生の「参加」を促す授業の工夫が、どのように学生に受け止められるのかということについて、授業満足度の観点から考察を加える。学生が、授業に対する高い満足感を得たならば、そこには、授業の目的に迫るための積極的な学習活動が展開されたということが考えられるからである。なお、「参加」という用語について、杉江他<sup>7)</sup>は「体の参加」、「頭の参加」、「相互作用への参加」の3つの形を挙げている。「体の参加」は授業の過程に様々な作業を伴うステップを入れることで可能となり、「頭の参加」は学生の問題意識にふれる内容をわかりやすく提供することで可能になる。「相互作用への参加」は学生相互、学生と教師間の質疑応答等の機会を設けることで可能になる。そして、これらの「参加」の工夫が学生の学習意欲を喚起することになるのではないかと提言している。

本研究では、杉江他<sup>7)</sup>による「3つの参加」を取り入れた授業を「参加型授業」と捉え、以下、本稿で用いるものである。

## 2. 方法

### 2-1. 調査対象参加型授業

筆者の担当する「教養演習～関係づくりの技法(エンカウンター)」を対象とした。授業の目的は、「集団カウンセリングの一技法である構成的グループ・エンカウンターの体験を通して、自他の理解を促す」と設定した。

構成的グループ・エンカウンターとは、心理的な課題であるエクササイズの体験と事後の仲間同士によるシェアリング(分かち合い、振り返り)を通して、グループ内のリレーション及び個々の自己発見を促進することをめざす、集団カウンセリングの一技法である。「構成的」の名が示

すとおり、リーダーが時間、人数、課題等の「枠」を提示しながらグループ活動を展開する。時間割に沿って日常生活が流れる学校現場にはなじみやすく、「教師が使えるカウンセリング」として現在、注目度の高い技法である。

主な授業展開は次の通りである。

グルーピング；自他の理解を促すためには、人とのかわりが欠かせない。「相互作用への参加」の場づくりのため、毎回、筆者がリーダーとなり、バースデーライン（誕生日整列）等のショートエクササイズを活用したグルーピングを実施した。グループサイズは4人を基準とした。

目標確認；毎回、90分の授業の到達ゴールがどこにあるかを明確に示すようにした。例えば、「本時は、構成的グループ・エンカウターの体験を通して、『自分を知る（自己理解）』ことが目的です。今、エンカウターは学校現場における不適応予防に活用されることが多くなってきています。実際の事例も紹介しながら、エンカウターにふれる時間とします」等の説明を行った。

エクササイズ体験；まずはじめに、インストラクションとして、学生自身の問題意識にふれるよう、具体的な事例を交えながら理論説明を行った（「頭の参加」）。続いて、理解がより深まるように、自他理解を促すようなエクササイズを実施した（「体の参加」、「相互作用への参加」）。なお、具体的なエクササイズ例は、Table 1に示した。エクササイズの出典は、「パスは待ってくれない」（プレスタイム社）、「偏愛マップコミュニケーション」（齊藤孝著、NTT出版）、その他は「エンカウターで学級が変わる」（國分康孝編、図書文化）である。

シェアリング；エクササイズを体験した後、各グループごとに、エクササイズの目的に沿って、各自が気づいたことや感じたことを語り合う時間がシェアリングである。時間は5～10分を基本とした。話し合いの中で自他理解が深まる時間である（「頭の参加」、「相互作用の参加」）。

まとめ（振り返り用紙記入）；毎回、授業の最後には、本時の目的に沿っての到達度、授業を通して気づいたこと、感じたことに関する自由記述を求めた。「体の参加」、「頭の参加」により、授業のまとめとした。

## 2-2．調査対象者

「教養演習～関係づくりの技法（エンカウター）」受講した1年生22名。

## 2-3．調査時期

2008年12月～2009年1月。対象授業の後半（13回目）の授業中に質問紙を配布し、10分間の回答時間後、回収した（回収率100%）。また、対象授業の最終（15回目）の授業後に自由記述アンケートを配付し、10分間の回答時間後、回収した（回収率100%）。なお、質問紙及び自由記述アンケートは個人の特定ができないよう、無記名とした。

## 2-4．測定具

質問紙は、二宮他<sup>8)</sup>（2004）の「大学授業観尺度」と本学授業満足度アンケート項目を参考に作成した「授業満足度尺度」（曾山<sup>9)</sup>、2009）を使用した。授業満足度尺度は3因子から構成され、第1因子は「参加・集中の工夫」であり、「板書や資料などの準備が十分になされた授業である」、「教師の熱意や意欲が感じられる授業である」等の7項目からなる。第2因子は「目標・基準の明示」であり、「成績評価の基準が明示された授業である」、「シラバスに示された内容が満たされた授業である」等の4項目からなる。第3因子は「専門的・実践的な内容」であり、「教養や専門性を身につけられる授業である」、「自分の将来に役立つ授業である」等の3項目からなる（Table2）。この尺度を用い、本「教養演習」に対する満足度への回答を求めた。具体的には、満足度に関し、「あなたは本参加型授業に対して、どのように感じていますか」という教示に対して、5件法（全くそう思わない：1～大いにそう思う：5）で回答を求めた。各得点が高いほど満足度に対する自己評価が高いものとした。なお、質問紙内の教示である「本参加型授業」に関しては、「この教養演習は、関係づくりの技法であるエンカウターを学ぶ授業ですので、皆さんには毎回、エクササイズ体験を通してメンバー同士がかかわる時

Table 1 実施エクササイズのねらいと内容

講義	エクササイズ	ねらいと内容
第1回	ネームゲーム	(ねらい) 信頼体験 ・3, 4人で円形に座る。トッブを決め、順番に名前をつなげていく。例 ; 「佐藤さんの隣の小林です」, 「佐藤さんの隣の、小林さんの隣の鈴木です」 ・2回目は、「好きな食べ物」を紹介しながら、同様にネームゲームを続ける。例 ; 「バナナが好きな佐藤さんの隣の、納豆が好きな小林です」
第2回	二者択一	(ねらい) 自己理解・他者理解 ・3, 4人で円形に座る。対照的な二つの言葉が書かれたシートを見て、自分の好きな方、大切な方を選び、理由も書く。グループでそれぞれの選んだものを話し合う。
第3回	トラストウォーク	(ねらい) 信頼体験 ・ペアになり、1人が目を閉じ、もう1人が声を出さずに教室を案内して歩く。
第4回	インタビュー	(ねらい) 自己・他者理解 ・ペアになり、インタビューする人、受ける人を決める。2分間でインタビューを行った後、役割を交代して、再度行う。
第5回	宇宙船での選択	(ねらい) 自己・他者理解、自己主張 ・トラブルを起こした宇宙船内の人間関係を描いたシナリオを読み、状況を考えて行動していると思われる登場人物に各自順位をつける。その後、グループで話し合い、最終的にグループとしての順位付けをする。
第6回	みんなでリフレミング	(ねらい) 自己受容 ・ペアを作り、相手方ペアと向き合って座る。自分の短所と思うことをシートに書く。相手方ペアと相互にシートを交換する。ペアで話しあい、相手方の書いた短所を「良い言葉(長所)」に書き換える。書き換えた長所を相手方に伝え、感想を話し合う。
第7回	バスは待ってくれない	(ねらい) 自己・他者理解、自己主張 ・5, 6人のグループを作る。各自が課題解決に向けた情報カードを均等に持ち合う。「情報は口頭でのみ伝え合う」をルールに、時間内で協力しながら課題解決を目指す。
第8回	エゴグラム	(ねらい) 自己・他者理解 ・各自、エゴグラムチェックシートに回答し、自己採点、グラフ化する。グループメンバーに対して、自分が思うイメージも伝え合う。
第9回	人生ハウマッチ	(ねらい) 自己・他者理解 ・「健康」、「結婚」、「友人」等、人生において必要だと思われる20項目について、各自値段を付け、その理由も考えておく。その後、グループ内で発表し合う。
第10回	長所の棚卸し	(ねらい) 自己・他者理解 ・苦手と思う友人、知人を一人思い浮かべる。その人の「長所、いいところ」を思えるところを、2分間で書けるだけ書き出す。その後、グループ内で発表し合う。
第11回	私のお願い聞いて	(ねらい) 自己主張 ・ペアになり、お願いする人、断る人を決める。2分間、お願いする人は自分の思いを遂げる(アサーションよう、お願いを続ける。断る人は、理由をつけて断り続ける。時間終了の合図とともに、断ロールプレイ)る人は、相手のお願いを受け入れる。役割を交代して再度行う。
第12回	偏愛マップコミュニケーション	(ねらい) 自己理解・他者理解 ・自分が特に好きなもの、こだわって好きなものを、文字や絵などを使いながら、1枚の用紙にマップとして表現する。その後、グループ内で発表し合う。
第13回	気になる自画像	(ねらい) 自己受容 ・自画像シートを使い、自分のいいところを25の選択肢から3つ選んで書き込む。次に、メンバーのいいところを同様に3つ選んで書き込む。その後、順番にメンバーが選んでくれたいいところを伝えてもらい、シートに書き込む。

間を設定しました。相互にかかわったという意味で、『参加型』という表現を使っています」という解説を行った。

自由記述アンケートは、「半期の本授業を受けて、気づいたことや感じたことを自由に書いてください」という教示を記した用紙への回答を求めた。

Table2 授業満足度尺度

<p>&lt;参加・集中の工夫&gt;</p> <p>板書や資料などの準備が十分になされた授業である</p> <p>教師の熱意や意欲が感じられる授業である</p> <p>要領よく進められる授業である</p> <p>集中しやすい雰囲気づくりのなされた授業である</p> <p>教師の話し方が明瞭で聞き取りやすい授業である</p> <p>学生が参加できるように工夫された授業である</p> <p>ついつい聞き入ってしまう内容の授業である</p>
<p>&lt;目標・基準の明示&gt;</p> <p>成績評価の基準が明示された授業である</p> <p>シラバスに示された内容が満たされた授業である</p> <p>学生の理解度が確認されながら進められる授業である</p> <p>目標・ポイントが明示された授業である</p>
<p>&lt;専門的・実践的な内容&gt;</p> <p>教養や専門性を身につけられる授業である</p> <p>自分の将来に役立つ授業である</p> <p>新しいことを学べる授業である</p>

### 3. 結果

#### 3-1. 「教養演習～関係づくりの技法（エンカウンター）」に対する満足度

本研究の対象授業である「教養演習～関係づくりの技法（エンカウンター）」に対する満足度の平均値及び標準偏差を Table3 に示した。また、Fig1～Fig3 に対象学生の満足度の分布をヒストグラムとして示した。

満足度平均値及び度数分布から、「参加・集中の工夫」、「目標・基準の明示」、「専門的・実践的な内容」の各因子に対する満足度はいずれも高く、特に、「参加・集中の工夫」に関する満足度が高いことが明らかになった。また、授業満足度尺度全 14 項目はいずれも平均値が 4 点を上回り、「学生が参加できるように工夫された授業である（4.77）」、「教師の熱意や意欲が感じられる授業である（4.73）」、「教師の話し方が明瞭で聞き取りやすい授業である（4.73）」等への満足度の高さが示された。

#### 3-2. 「教養演習～関係づくりの技法（エンカウンター）」に対する自由記述

本「教養演習」に対する学生の自由記述アンケートは、KJ法を参考に項目を立てて整理した（Table4）。

本「教養演習」の目的は、「集団カウンセリングの一技法である構成的グループ・エンカウンターの体験を通して、自他の理解を促す」ということにあった。学生の自由記述を、「自分を知る・他者を知る」、「出会い・かかわりの楽しさを知る」、「その他」の 3 つのカテゴリーに分類・整理したが、目的に関連する多くの記述が示された。

「自分を知る・他者を知る」カテゴリーにある「自分のよいところ、他人から見た自分の印象を知ることができ、とても有意義だった」、「自分のよいところを知ることができ、とても自信になった」等は、「体の参加」、「相互作用への参加」を意図した授業だからこそ生まれた記述であろう。「出会い・かかわりの楽しさを知る」カテゴリーにある「考えさせられ、自分を見つめ直すこともたくさんあり、みんなのことが大好きになった授業だった」等は、学生にとって関心のあるコミュニケーションに焦点を当てたことで「頭の参加」に関する記述が生まれたのであろう。

学生による多くの自由記述から、杉江他<sup>7)</sup>の提唱する「体の参加」、「頭の参加」、「相互作用への参加」を取り入れた本「教養演習」は、学生の授業満足度及び学習意欲を高め、授業の目的に迫ることができる授業実践であることが示唆されたと考えられる。

Table3 本「教養演習」に対する満足度平均値

	平均値
<b>. 参加・集中の工夫</b>	32.36(5.25)
・板書や資料などの準備が十分になされた授業である	4.50(0.80)
・教師の熱意や意欲が感じられる授業である	4.73(0.88)
・要領よく進められる授業である	4.59(0.73)
・集中しやすい雰囲気づくりのなされた授業である	4.50(0.91)
・教師の話し方が明瞭で聞き取りやすい授業である	4.73(0.77)
・学生が参加できるように工夫された授業である	4.77(0.75)
・ついつい聞き入ってしまう内容の授業である	4.55(0.96)
<b>. 目標・基準の明示</b>	17.59(2.99)
・成績評価の基準が明示された授業である	4.50(0.67)
・シラバスに示された内容が満たされた授業である	4.27(0.77)
・学生の理解度が確認されながら進められる授業である	4.32(1.09)
・目標、ポイントが明示された授業である	4.50(0.91)
<b>. 専門的・実践的な内容</b>	13.77(2.11)
・教養や専門性を身につけられる授業である	4.55(0.74)
・自分の将来に役立つ授業である	4.59(0.80)
・新しいことを学べる授業である	4.64(0.85)

( )内は標準偏差

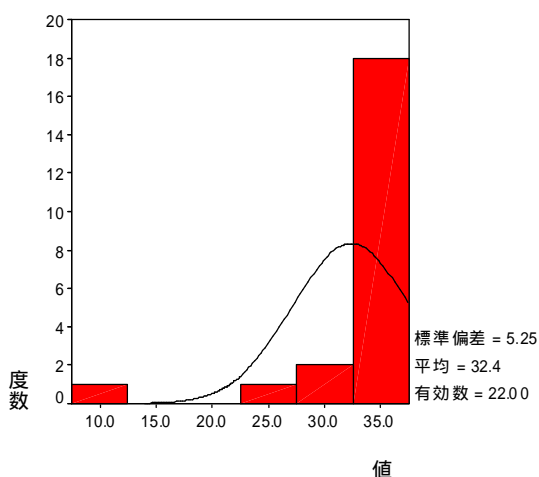


Fig1.参加・集中の工夫

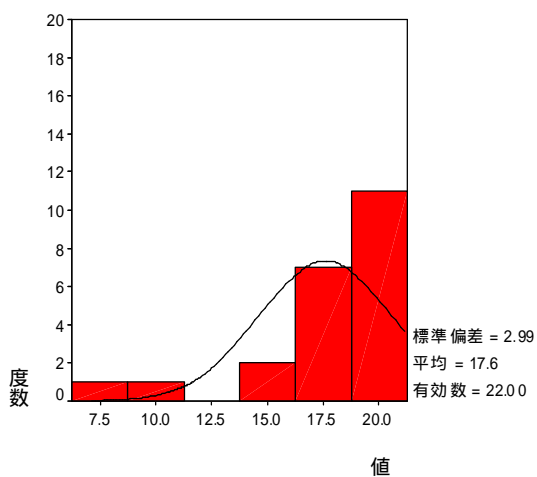


Fig2.目標・基準の明示

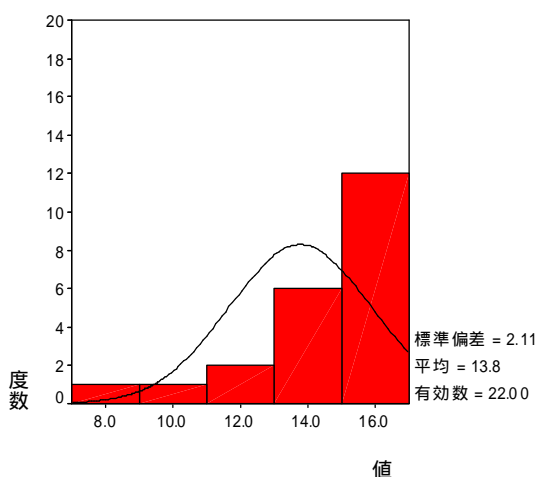


Fig3.専門的・実践的な内容

Table4 学生の自由記述～本「教養演習」を受けて、気づいたこと、感じたこと

< 自分を知る・他者を知る >

自分ことをよく知ることができた授業だった。自分にとってプラスで前向きになれる授業ばかりだった。全てのグループワークが素敵で、みんなが素敵だった / 自分のよいところ、他人から見た自分の印象を知ることができ、とても有意義だった / メンバーと仲良くなれただけでなく、新たな自分をいろいろ発見でき、とてもよい体験だった / 自分を知らずともいい機会だった / 自分のよいところを知ることができ、とても自信になった / 人は見た目だけではわからないとあらためて感じた

< 出会い・かかわりの楽しさを知る >

出会いの楽しみが増え、相手への対応の仕方も身についた気がする / 勇気を少しでも持って人と接し、ふれあうことが大切と思った。大好きな授業だった / 人とかかわることの楽しさ、重要性を学ぶことができた / いろいろな人とかかわることができ、とても充実した授業だった / 周りの人をもっと知りたい、かかわりたいという気持ちにさせてくれる授業だった / 授業を通して、少し人づきあいに慣れることができ、成長した感じがしてうれしい / 大学に入ってから授業に意欲的になれなかったが、この授業は本当にためになるし、成長できたし、いろいろ考えることができた。やっぱり、人とかかわることは素敵だと思った / 人との意見交換が大事だということがあらためてわかった / 毎週、いろいろな人と話すのがとても楽しかった。コミュニケーションの力が前よりもついたと思う / 考えさせられ、自分を見つめ直すこともたくさんあり、みんなのことが大好きになった授業だった

< その他 >

他の科目じゃ学べないことを学べたと思う。あっという間の半期だった / 想像以上に面白いことをしていた授業だった。こういう授業ならまた受きたい / 最初気まずい感じがしても、エクササイズを繰り返し行うことで、その気まずさが消えた。信頼関係を築くには、共感が必要ということがわかった / 体験型の学習はとても理解しやすかった / 生徒としても人としても成長できる授業だった。コミュニケーション不足の時代だからこそ、このような授業が増えるといい

#### 4. 考察

杉江他<sup>7)</sup>は、大学における授業改善に関し、「内容の良い講義が良い授業だと評価されてきたが、内容は良くて当たり前、さらに、それがいかに適切に学生に届いたかという観点の評価が必要である」と述べている。また、同じく杉江他<sup>7)</sup>は、「教師の仕事の第一歩は、学生の学習意欲を高める工夫にある」とも述べている。教師として学生に伝えたい知識、育てたい力があるのと言うまでもない。しかし、学ぶ側に学習への意欲がないことには、それらを伝え、育てることが容易でないことは明らかである。

本研究は、「教養演習」を対象授業として設定し、授業目的である「自我理解の促進」に迫るために構成的グループ・エンカウンターを活用した参加型授業実践の効果を考察するものである。本「教養演習」で目指していたものが果たして受講学生に届いたかどうか、すなわち授業目的が達成されたかどうかを、授業満足度尺度による量的評価、学生の自由記述による質的評価に基づき、複眼的に検証を行った。量的、質的評価の結果からは、本「教養演習」における「自我理解の促進」という目的が十分に達成されたことが示唆された。本「教養演習」における学生の学習意欲を高める授業改善の工夫について、以下に考察を加える。

本「教養演習」は、構成的グループ・エンカウンターを活用し、学生の学習への参加を90分の過程の中に意識的に設定した授業スタイルである。具体的には、筆者と学生、学生同士による相互交流の場面をエクササイズとシェアリングを核に複数設定した授業であり、杉江他<sup>7)</sup>の提唱する「3つの参加の形」-「体の参加」、「頭の参加」、「相互作用への参加」-を具現化した授業である。

これまでの大学における授業改善の試みとしては、杉江<sup>3)</sup>(2000)、関田<sup>4)</sup>(2005)、安永<sup>5)</sup>(2009)らの協同学習を活用した実践が報告されている。これらの報告では、参加型授業の効果について述べられているが、量的・質的評価によるエビデンスが示されたかどうかという点で課題が残されているのではないかと考えられる。また、現在、各大学において実施されている、一斉講義スタイルとは異なる演習、ゼミナール形式の授業形式についても、「受講学生

に内容が届いたかどうか」、すなわち、授業目的の達成評価に関する検証の点で、課題が残されているのではないかと考えられる。このような課題に対し、本研究では、構成的グループ・エンカウンターを活用した「教養演習」が学生の学習意欲を高め、授業目的に迫ることができたかどうかについて、量的・質的評価に基づくエビデンスを示したことに意義があるのではないかと考えられる。

また、対象が1年生であった本研究の結果からは、大学初年次教育に関する知見も得られたのではないかと考えられる。昨今、小学校6年生から中学校1年生にかけて、学校不適応状態に陥る生徒が激増する現象を「中1プロブレム(ギャップ)」と呼ぶが、友人関係、カリキュラム等の違いなど、学校種間の段差に戸惑い、不適応状態に陥るのは大学生もまた例外ではない。初年次教育には何が必要かということを考察した白川他<sup>10)</sup>(2007)は、1年生を対象とした基礎ゼミ運営を通じた「学生の居場所づくり」の重要性を明確に指摘している。それ故、大学入学後の早い段階において、大学生生活に適應させるために必要な生活態度や学習スキルを促し、学生の居場所を作るアプローチは、確かに今、必要なことと言えるのではないだろうか。この「居場所」という言葉について、全国各地の学級集団の状況を調査・分析した河村<sup>11)</sup>(2001)は、「ルールとふれあいがある集団は、子どもたちにとって居場所となる集団である」と述べている。

本研究で取り入れた構成的グループ・エンカウンターは、「構成的」の名が示すとおり、様々な「枠」、すなわちルールの中で学習活動が展開されていくものである。一定のルールにより安心・安全感が保障される中で、「相互作用への参加」を促し、次第にメンバー間のふれあいが生まれるように展開される技法である。学生の自由記述に示された、「周りの人をもっと知りたい、かわかりたいという気持ちにさせてくれる授業だった」等の記述は、本「教養演習」がふれあいのある学びの空間であり、居場所となる集団であったことを示唆するものだろうと思われる。本研究成果により、今後の初年次教育の在り方を検討する際の一つの材料を提供することができたのではないかと考えら



れる。

## 5. 今後の課題

先行研究にあるように、大学における参加型授業の実践が増えつつあり、授業改善の一方策として関心を抱く教師も多くなってきている。しかしながら、従来の一斉講義スタイルからの転換に躊躇する教師が多いのもまた事実である。「学生の学習意欲が乏しい」、「コミュニケーションがとれない学生が多い」、「授業中の私語が気になる」等々は、多くの大学関係者の耳に届く言葉である。そうした問題点の改善に向け、参加型授業の有効性を一つ一つ積み上げていくことが課題の1つであると考えている。特に4年間の大学生活のその後を左右するといっても過言ではない初年次教育における参加型授業の実践を積み上げ、エビデンスによる説得力をもった研究知見を発信していくことを引き続き課題としたい。

## 6. 参考文献

- 1) 文部科学省 2009 学校基本調査速報値
- 2) 中村博幸 2009 ゼミを中心としたカリキュラムの連続性 嘉悦大学研究論集, 51 の 3
- 3) 杉江修治 2000 学生主体の双方向授業づくり 中京大学教育論叢, 40 の 3, 189-198
- 4) 関田一彦 2005 集中講義「教育心理学」が受講者の心理的態度に与える影響 創価大学教育学部論集, 56, 研究ノート, 71-78
- 5) 安永悟 2009 大学における協同学習の実践 - 大学授業への導入 - 日本協同教育学会第 6 回こうべ大会プログラム・要旨集, 41-42
- 6) 小森道彦・藤澤良行・福田敦志・白川哲郎 2008 大阪樟蔭女子大学における初年次教育改革の方向性と課題 大阪樟蔭女子大学論集, 45, 19-31
- 7) 杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ 2004 大学授業を活性化する方法 玉川大学出版部, 10-12
- 8) 二宮克美・桑村幸恵・稲葉小由紀・山本ちか 2004 大学生の授業に対する意識(1)大学授業観と大学適応感との関連 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 13, 146-147
- 9) 曾山和彦 2009 参加型授業を受講した学生の満足度と学習意欲に関する考察 名城大学教育年報, 3, 13-20
- 10) 白石哲郎他 2007 大阪樟蔭女子大学における初年次教育改革の方向性と課題 大阪樟蔭女子大学論集, 44, 157-171
- 11) 河村茂雄 2001 グループ体験によるタイプ別学級育成プログラム 図書文化

<補足>

本研究の一部は、日本協同教育学会第 6 回神戸大会(2009)において、実践報告を行ったものである。